

2-1-2

Playful Pedagogy とは

喜びいっぱいの生命感動学

小林 登

Kobayashi Noboru …………… CRN 名誉所長、東京大学名誉教授



医学博士、東京大学名誉教授、CRN名誉所長、国立小児病院名誉院長、日本子ども学会名誉理事長。1954年東京大学医学部医学科を卒業し、東京大学教授、国立小児病院院長、国際小児科学会会長などを歴任。日本医師会最高優秀功労賞（84年）、毎日出版文化賞（85年）、国際小児科学会賞（86年）、武見記念賞（2003年）などを受賞。01年には勲二等瑞宝章を贈られた。主な一般向け著作に、『風韻怎思——子どものいのちを見つめて』（小学館）、『子ども学のまなざし』（明石書店）など多数。

● 大人の接し方が、 子どもに及ぼす影響とは

保護者や保育者が子どもに優しく、思いやりをもって接することが、子どもの体と心の発達にとって、いかに重要であるかを考えてみたい。

私の専門である小児科学のキーワードの一つに、「Joie de vivre（生きる喜びいっぱい）」というフランス語がある。「Joie de vivre」であることは、子どもの心身の健やかな成長に欠かせない要素として以前から重視され、その正当性がさまざまな学問領域の研究によって科学的に裏づけられて

もいる。

例えば、イギリスの栄養学者Widdowsonが1954年に発表した論文を見てみよう。これは、ドイツのA、B2つの孤児院を約1年間調査し、養育者の接し方の違いが子ども

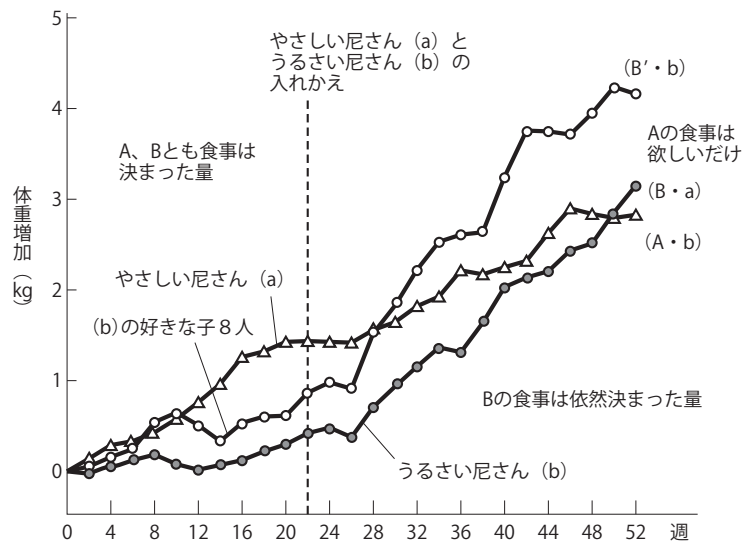


図1 養育者の性格と孤児の体重増加曲線

の発達にどのように影響するかを研究した論文である。— 図①参照

どちらの孤児院も子どもに与える食事の量は同じだったが、子どもに優しく接するシスターがいたAの孤児院の子どもは体重がよく増え、子どもに厳しく接するシスターがいたBの孤児院の子どもは体重があまり増えなかった。しかし、Aの孤児院の子どもほどではなかったが、Bの孤児院でシスターに特に可愛がられていた子ども8人は、ほかの子どもに比べれば体重が増えていた。

調査を始めて半年ほど経った頃、Aの孤児院のシスターが辞めたため、Bの孤児院のシスターが彼女の可愛がっていた8人の子どもを連れ、Aの孤児院に移ることになった。Bの孤児院には体重が増えていない子どもばかりが残ったわけである。

そして、Aの孤児院ではシスターが代わったのを機に子どもの食事の量を増やしたところ、Bの孤児院から来たシスターに可愛がられている8人の子どもは以前と同じように体重を伸ばしたが、もともとAの孤児院にいた子どもは以前に比べて体重が増えなくなり、シスターに可愛がられていた8人の子どもの平均体重がAの孤児院にいた子どもの平均体重を上回った。

一方、Bの孤児院では、子どもに優しく接するシスターを新たに迎えた。すると、食事の量は増やさなかったにもかかわらず、どの子どもの体重も順調に増えるようになった。その平均体重は、数か月後には、もともとAの孤児院にいた子どもの平均体重を上回ったほどである。

優しく育てられた子どもほど体の成長が良くなるのは、子どもが「Joie de vivre」になっているためと考えられる。

● うれしさを感じなければ 成長ホルモンの分泌が 阻害される

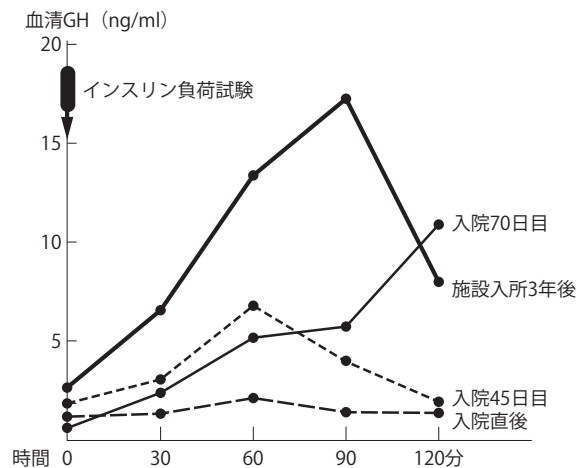
「Joie de vivre」であることは、身体の発達を促す物質、成長ホルモンの分泌とも密接な関係があることがわかっている。これについて見てみよう。

結婚生活がうまくいかないなど何らかの事情により、保護者が我が子に愛情をもって接することができなくなると、子どもの発達に大きく影響する。特に乳児期・幼児期の子どもは下痢や嘔吐を繰り返し、身長と体重も伸びなくなり、さらには抑鬱症状が表れるなど、身体と精神の健康状態が明らかに損なわれることが多い。

保護者から十分な愛情を受けられないために表れるこのような子どもの症状を、「情緒剥奪症候群」と呼ぶ。深刻な症状の子どもは保護者から離し、病院や施設などで治療を受ける必要がある。

「情緒剥奪症候群」の子どもから採血し、成長ホルモンの分泌量を測ると、治療を始めた当初は極めて少ない。そのために心身の発達に支障をきたしたと考えられる。し

愛情遮断性低身長の子どものGH分泌能の経時的変貌



図②

かし、治療の過程で医師や看護師から優しくされ、可愛がられると、成長ホルモンは日を追って増加し、症状も改善していく。— 図②参照 気持ちが「Joie de vivre」になるからである。そして3年ほど経てば、成長ホルモンは安定して正常に分泌されるようになる。

子どもが成長ホルモンを分泌するためには周囲の大人が温かく、思いやりをもって接することが、いかに重要であるかがわかるだろう。

● 「Joie de vivre」であることと学びとの相関

「Joie de vivre」であれば、学びにも良い影響を及ぼす可能性が高い。これは、近年の脳科学や生理学の研究によっても裏づけられつつある。

アメリカの生理学者MacLeanは脳の三位一体説を提唱し、人間の脳をその機能によって次の3階層に分けた。— 図③参照

①魚類・爬虫類脳

脳の中枢にあたる間脳・脳幹・脊髄からなり、呼吸や血液循環などの生命を維持す

る機能や身体を動かす機能のみを司る脳である。脊椎動物の中で進化の程度が低い魚類や爬虫類などの脳である。

②原始哺乳動物脳

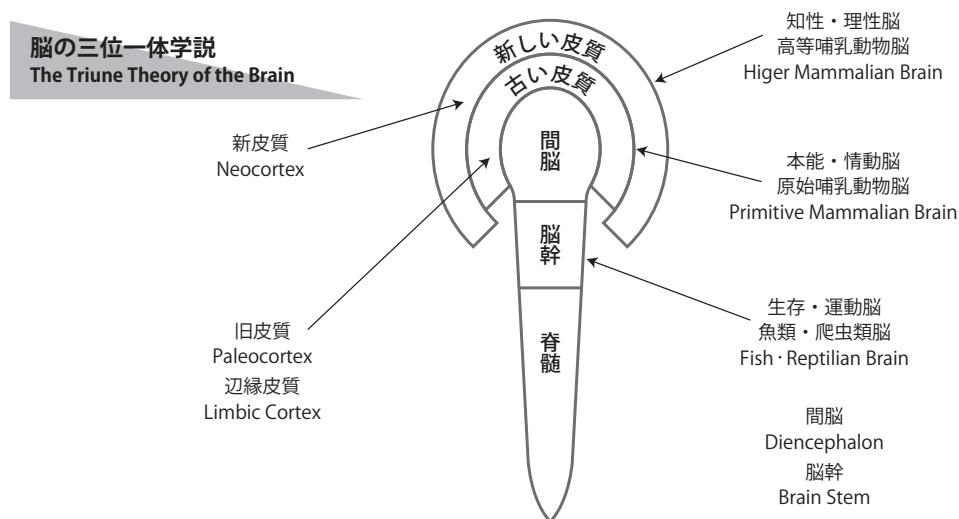
①の外側に発達した海馬、扁桃体、視床下部・上部などの大脳辺縁系からなり、食欲や性欲といった種の保存に必要な情動、さらに喜びや悲しみといった感情を生み、生理機能などをコントロールする機能を司る。原始的な哺乳類の脳が有する階層である。

③高等哺乳動物脳

②の外側、脳の最上層部に発達した大脳新皮質を有する脳で、学習などの知的行動を司る。この階層は、人間や猿、馬などの高等哺乳類の脳にしかない。

このようにMacLeanの研究は、体のプログラムである①、心のプログラムである②、知性のプログラムである③、という具合に、脳が段階的に進化してきたことを示している。

それぞれの位置を見ると、中枢部の①と上層部の③に隣接して②があることがわかる。先に孤児院での体重増加についての研



図③

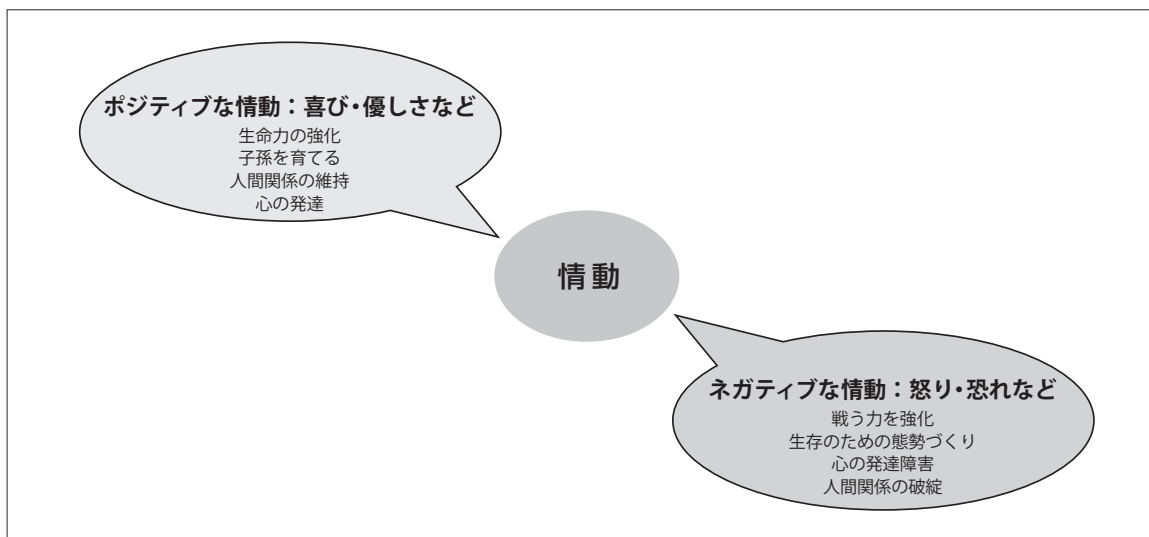


図4

究や「情緒剥奪症候群」の子どもの例で見たように、「Joie de vivre」である子どもの体はよく発達していた。つまり、感情を司る②は、隣接する①の機能、生命維持や運動などの機能に大きく作用しているのである。したがって②が、やはり隣接する③の機能、知性・理性に対しても影響する可能性は高いと考えられる。

また、②が生み、生理機能などをコントロールする感情は、大きく2つに分けられる。—— 図4参照 1つは怒りや恐れなど、いわばネガティブな感情である。苛酷な生存競争を勝ち抜いたり、危険を察知し自分の身を守ったりするためには必要になるが、精神の発達を阻害し、人間関係を破綻させることにもなりかねない。

感情のもう1つは、喜びや優しさなど、いわばポジティブな感情である。心身の健全な発達を促し、人間関係を円満に保つ働きがある。安心して生活するうえで欠かせない感情である。これに満たされた状態こそ、「Joie de vivre」であると言ってよい。

知性を司る③は、感情を司る②に影響するとみられるため、ポジティブな感情を抱く方が、よく学ぶことができると言えるだろう。すなわち、「Joie de vivre」になるこ

とは、学びにとっても効果があると考えられるのである。

●あらゆる子どもが、「Joie de vivre」になれるように

子どもの感情は、周囲の大人の接し方によって大きく左右される。子どもが「Joie de vivre」になるためには、前にも述べたように、大人が優しく、思いやりをもって接することが重要である。他者に対する気遣いなど、社会で生きるために求められる力の基礎を育むことにもつながると、私は考えている。

大人に優しくされ、思いやられることが、子どもの成長にどのように影響するか、子どもはどのようなときに「Joie de vivre」になるか。脳科学などの知見を応用しながら、これらのメカニズムを解明するための学問として、私は「Child Bio-emotinemics (子ども生命感動学)」を提唱し、これを体系化することに力を入れている。あらゆる子どもが心身ともに健康に育っていけるように、今後も研究を続けていきたい。